

平成22年 6月10日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009年度
 課題番号：19530828
 研究課題名（和文）フィンランドナショナルカリキュラムの構造：家庭科教育との関連で
 研究課題名（英文） A Study of Frameworks of Finland National Curriculum for Home Economics Education
 研究代表者：甲斐 純子（KAI SUMIKO）
 福岡教育大学・教育学部・家政教育研究科・教授
 研究者番号：50156923

研究成果の概要：フィンランドのナショナルカリキュラムの「家族および家庭生活」に関する教育内容を中心に翻訳し、その枠組みを明らかにするとともに、フィンランドの家庭科教員養成の方法について、養成カリキュラムの検討および交流授業とインタビュー調査等から分析を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：教科教育

科研費の分科・細目：家庭科教育

キーワード：フィンランドナショナルカリキュラム、家族および家庭生活、家庭科教員養成
 活用型学習、協同学習

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、欧米諸国に国家の教育の指針ともいえるナショナルカリキュラムが作成された。また、2003年の国際学力調査（PISA調査）において、それまで上位を占めてきた日本をはじめとする工業立国に代わって、フィンランドやカナダ、ニュージーランドなどの国々が高い学力を示した。とくに、フィンランドは、2007年の調査でも高位を占め世界の注目を集めている。

フィンランドの公教育において、2004年発行のナショナルカリキュラムは、国家としての教育指針と内容を初めて統一的に示した

ものと考えられ学校教育への影響は大である。とくに、「家族および家庭生活」関係領域に関する教育は、7学年の食生活教育を中心にした「家庭科」と小学校1年生から技能教育中心の衣生活教育の「クラブサイエンス」がそれぞれ独立した教科となっており、児童・生徒に人気の高い教科である。また、幼少期から協同学習を多く経験させており、集団で学ぶ姿勢が身につけている。

さらに、「生きる力」を培うこと、活用型の学びの深化を図ることが、新教育指導要領のテーマとしてあげられている。家庭科は学校で学んだ知識と技術を家庭生活においていかに活用する方法が問われている。

フィンランドは、活用型の教育実践で成果をあげている。

2. 研究の目的

今日わが国では、子どもたちの対人関係スキルやコミュニケーション能力の低下が問題視されている。このことは、新指導要領でも、「問題解決的な学習の一層の充実」とともに「他者とかかわる力の育成」が提唱され、学校教育現場では幼稚園から大学まで、いわゆる参加型の授業や協同学習(collaborative learning)への取組みが盛んである。子どもたちの協同学習スキルを向上させるには、まず、教師が協同学習スキルを獲得、向上させる必要があると考える。

OECDのPISA調査において、最上位に位置しているフィンランドは幼児期から協同学習を取り入れている国であり、家庭科教育の目標にも、「協力的な態度」、「集団で行動する方法の学習」が掲げられている(2004年版‘national core curriculum for basic education’)。また、教員養成教育においても協同的学習形態が多く用いられているということである。

そこで、本研究では、フィンランドの教員養成大学での家庭科教育関連科目における協同学習の実践と成果について考察し、わが国の家庭科教員養成教育に資することを目的とする。

また、フィンランドの義務教育段階のカリキュラム構造とその理論的背景及び教師教育の内容と方法について探求し、とくに、「家族および家庭生活」に関する教育内容を軸として全体的枠組みと構造を明らかにすることにより、家庭科と家庭科関連科目との連携や教員養成教育のカリキュラムと指導法の特徴を踏まえ、わが国の家庭科教育の改善点を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

フィンランドナショナルカリキュラムの翻訳および総合学校における授業見学から小、中学校における家庭科教育の実態を明らかにした。また、ヘルシンキ大学およびヨエンスー大学東サヴォンリンナ分校との授業交流、家庭科専攻学生へのインタビュー、家庭科教員養成カリキュラムからフィンランドの家庭科教員養成の方法を分析した。

〈使用した資料および視察・交流内容〉

1) NATIONAL CORE CURRICULUM FOR BASIC EDUCATION 2004’

2) 小・中学校教科書

・「環境と自然」‘Environmental and natural studies’ (小学1～4年生)

・「家庭科」‘Home economics’ (中学1～3年生)

・「歴史」‘History’ (小学5、6年生と中学1～3年生)

・「社会」‘Social studies’ (中学1～3年生)

3) 授業見学及びインタビュー

・ピーツキヘルシンキ大学附属総合学校校の家庭科授業見学

・ヘルシンキ大学およびヨエンスー大学の家庭科教員養成授業見学と授業交流

・家庭科学生へのインタビュー

・家庭科教育とクラフトサイエンスの教授にフィンランドの協同学習を中心とする教育理論と教員養成カリキュラムについてインタビュー

実施大学は下記①②

① ヘルシンキ大学

Liisa Haverinen 家庭科教育法担当准教授

2007年12月10～14日家庭科2年生11名

「協同学習によるディスカッション授業と製作実習」の授業交流

② ヨエンスー大学サヴォンリンナ教員養成科 Anna-Liisa Kosonen 家庭科教育、栄養教育担当教授

2008年10月23～24日家庭科1年生17名

「協同学習による調理実習」への参加

1) 家庭科教員養成コースを持つ国立2大学であるヘルシンキ大学とヨエンスー大学において、家庭科教育法関連科目の中で、「ディスカッション型」と「実習型」の2種類の形態の協同学習を実施する。

2) 実施後受講学生に質問紙を用いたアンケートまたはインタビュー調査を実施し、学習成果を確認する。尚、下記太字は日本側主導の活動を示す。

〈ディスカッション型協同学習〉

① ペア型(2人×4組)・・・相手の集団の中での役割を観察、報告

② 問題解決型(11人)・・・おりがみの花の実物から折り方手順解明

③ 交流型(11人)・・・授業DVD視聴後質疑応答、助言アンケート

(DVDの題材：中学校(食物)

「1日分の献立作成」)

〈実習型協同学習〉

④ 製作(17人) ふくろ作り・・・手縫い、巾着型

⑤ 調理(6班17人) ハンバーグ、サラダ、チョコレートムースなど

(小グループ調理実習法についてのインタビュー)

期間：①～④2007年12月10日～14日

2008年10月23日～24日

対象：①～④国立ヘルシンキ大学教育学部家庭科専攻2年生11名

⑤国立ヨエンスー大学教育学部サ

ヴォンリンナ分校家庭科専攻 1 年生 17 名。

4) 国家教育委員会において調査官にフィンランドの家庭科教育についてインタビュー

4. 研究成果

(1) ナショナルカリキュラムの枠組み
フィンランドでは、2004 年実施のナショナルカリキュラムに基づき、小、中学校の 9 学年の 'Basic Education' の上に高等学校→大学、または、実業学校→ポリテクニックかの大きく 2 種類の中、高等教育が実施されている。大学は全て国立大学であり、教員は学部 3 年、修士 2 年の計 5 年間の履修が義務づけられている。なお、フィンランドにおいて、「家庭科」の教員養成を行っている主な大学は、ヘルシンキ大学と東方のヨエンスーサヴォンリンナ教員養成校の 2 大学であり、計年間 40 名程度の家庭科教員を輩出している。

'Basic Education' には、近年の移民の増加にともなって、母国語や第二言語など「言葉」の教育が重視されている。

教科としては、「外国語」「数学」「環境と自然」「生物と地理」「薬品と化学」「健康教育」「宗教」「道徳」「歴史」「社会」「音楽」「ビジュアルアート」「手工芸」「体育」「家庭科」「選択科目」が設置されている。

「家庭科 (コティタロウス)」は、7 学年 (中学 1 年) に必修科目としておかれている。

「木工」も開設されており、男女に関わりなくどちらを履習してもよい。一方で、児童・生徒は「手工芸 (クラフトサイエンス)」を小学校 1 年生から履習しているの、「家庭科」では食生活に関する内容が多く含まれている。調理実習を中心に小グループ学習を進めている。8 学年、9 学年では、「家庭科」は選択科目となる。しかし、「家庭科」は必修の 7 学年のみならず、8、9 学年の生徒たちにも高い人気を占めている。フィンランドの児童・生徒の基礎学力の高さを支える基盤として生活や芸術に関わる技能教科のゆるぎない基盤ができていていると思われる。

ヴィーツキ附属総合学校の教員によると、フィンランドでは、「家庭科」必修は 1 年間だけであるが、「宗教」「道徳」「環境と自然」「歴史」「社会」「健康教育」などによって、小学校時代から「家族関係」「身体機能と食物の役割」などについて家庭科的学習が成されている。また、家庭での実践も多く、生活知と学校知の連結が容易である。従って、家庭や他教科で培ってきた知識、技能が家庭科で融合・熟成されている状態がある。

しかし、国家教育委員会家庭科調査官によると、家族の生活を大切にしてきたフィンランドでも、近年、経済中心の生活に代わりつ

つある、つまり、母親の勤務状況が厳しくなり、子どもたちの食事の時間が不規則になっているとのことである。フィンランドでもわが国と同様、家庭科教育の今後の課題は「食育」と「消費者教育」にあるとのことである。

(2) フィンランドの家庭科教員養成と交流授業の実施

2 年間 2 大学で 5 種類の協同学習が実施された。①は 40 分のディスカッションの中で、ペアになった相手の集団内での役割を見出すといった社会的判断力を要求される学習であり、②は折り紙の実物をほどこくことにより、折った手順を皆で解き明かす。それらの過程で、学生たちの価値観や思考力、判断力を養う点で評価できる。③は、共通の授業映像 (資料) を媒体にしてグループ内での意見交流を行う方法である。言葉の壁を越えて理解できるよう、フィンランドと日本に共通の学年 (中 1) と題材「1 日分の献立作成」を選択し流れを解説した。20 分程度のディスカッションの後、11 人中 6 人の学生から質問が、また、全員から豊富な助言が呈された。発想の中が広く活動を伴う助言が多いのが特徴である。④の「ふくろ作り」は、わが国の小学校教材である。和柄のハンカチや手ぬぐいを提供した。グループによる協同学習をしながら縫った学生でも平均 45 分要した。⑤は、3~4 人による小グループの問題解決型調理実習で、調理するものは班ごとに異なる。調理のレシピを手掛かりに班員の総力を挙げて作り上げる。読解力と他者と協同する力の養成を狙った指導法といえる。

技能教科である家庭科「コティタロウス」は中学校のみに置かれている科目である。しかし、生徒の取り組み意欲の高い科目となっている。そこで家庭科履修までにどのような科目や生活体験によって家庭科の学習レディネスが形成されているか分析を行った。

児童・生徒の学力進展のためにどのようなカリキュラムと実際の授業によって家庭科教員養成がなされているか年間全体の養成カリキュラムの内容について以下のことが分かった。

フィンランドの子どもたちの学力形成に及ぼす要因として、小、中学校のカリキュラムの内容とともに、教員の質の高さが注目される。そこでフィンランドで主に家庭科教員養成を行っているヘルシンキ大学とヨエンスー大学東サヴォンリンナ教員養成校における家庭科教育法の講義や演習を見学・交流することにより、修士課程まで含めた教員の養成教育の視点から、フィンランドにおいて家庭科

が児童・生徒の取り組み意欲の高い科目になっていた。



〈フィンランドの家庭科教育の評価基準〉
〔2004ナショナル・コア・カリキュラム〕

- 1) 協力的な適性
 - 集団で行動する方法の学習
 - 2) 情報の入手
 - 3) 生活管理のための作業スキル
- 〈習熟度の評価基準〉
- 理解力
 - 実際に行う力
 - 協同作業

- A 見本通り ～8点
B 少し応用 8点
C 創造的 9～10点

4. 家庭科教員養成の目標

〈ヨエンスー大学サヴォンリンナ教員養成科〉

学士

- 初級・・・家政学の学問的意義,家庭の活動の特徴,家政技能,探究的取り組み
中級・・・家政学の理解,概念と理論の形成,各領域の専門的知識・家政技能深める。家政学に精通,小規模の研究
上級・・・いっそう研究的取り組み,家政学の各領域を総体的にまとめ,研究を通じて一定領域に関する知識を深める。協同学習重視

修士 家庭科教員の職に就けるようにする。
栄養教育,消費者教育,環境教育という他コースの選択科目も認めている。博士課程への進学もある。

〔協同学習の実施内容〕

〈ディスカッション型〉

- 1) ペア型(2人×4組)・・・相手の役割を観察

- 2) 問題解決型 ……おりがみの花の折り方

- 3) 交流型 ……授業 DVD 視聴, 授業アンケート

(DVD の題材: 中学校(食物)「1日分の献立作成」)

〈実習型〉

- 4) 製作 ……手縫いのふくろ作り, 巾着型

- 5) 調理 ……マッシュポテト, ミートソース, サラダ, いちごヨーグルト, チョレートムースなど

・調理実習についてインタビュー

〈ディスカッション型協同学習の実践2種〉

- 1) 小集団内での相手の役割観察 (語り)
→ ペアになった相手

テーマ「これまで受けてきた評価について」

- 2) 折り紙の手順(技能)
「ポインセチア」を折る

〈中(食)「献立作り」授業の流れ〉

導入・・・3食分の献立例を見て栄養バランスを考える。

1. めあて・・・「献立を診断し、バランスのよいものに改善しよう」
2. 過不足のある食品群を見つける。
6つの食品群分類, ポイント計算
ポイントの表, 個別食品絵カード
3. 昼食の献立を改善する。
冷蔵庫の絵から適する食品を選ぶ。
4. 意見交流
5. まとめ: 学習プリントに記入する。

〈協同学習による調理実習インタビュー結果〉(回答者: ヨエンスー大学1年生17人)

- 1) 協同学習での調理実習は理解しやすい?

①協同学習は幼稚園時代から経験しているので慣れ親しんでいる。当たり前。

②自分の分担を成功させることでグループに貢献できるから楽しい。指導教官は献立と献立に「使う食品などの説明をするだけ。あとは学生たちがレシピを見ながら手順を相談する過程で思考が進む。失敗したときは皆で原因を考えればよい。

③子どもの頃から家庭で母の料理の手伝いをしているので、だいたいの基礎は持っている。学生たちの経験を合わせる。

- 2) 班ごとに作るメニューが違うのは学習内容に偏りが出る?

①違うものを作り教え合うと知識が広がるし、仲間が増える。

②なぜ日本では、クラス全員が同じメニューを調理するのか?



〈まとめと今後の課題〉 1) 献立,調理の授業では,学部生段階から,実践しながら,実物に触れさせながら知識を習得させていく指導法が徹底していること,
 2) 家庭科は7年生のみ必修であるが,他教科等で家庭科に関わる内容を補われている(養成における他教科との関連性)とが分かった。
 3) 家庭科教育及び家庭科教員養成において,協同学習が重視されており,授業の中で有効に活用されていることが分かった。

フィンランドでは教師教育は国家的業務であると意識されている。
 フィンランドの教員養成教育カリキュラムは学部・修士計5年間を組織的に積み上げている。

わが国も,教員養成学部4年間のカリキュラムはかなり組織的であるので,今後,学部と大学院を連結する教員養成カリキュラムと指導法の開発が必要と考えられる。また,指導法の一つとして今後,家庭科教員養成教育への様々な形の協同学習の導入の方法とその有効性について検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計3件)

- 1) 福岡教育大学家庭科教員教育研究会 (2007年11月)
- 2) 福岡教育大学家庭科教員教育研究会 (2008年11月)
- 3) 日本家庭科教育学会例会 (2009年11月)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

甲斐 純子 (福岡教育大学 教授)

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし